神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

雑記：16世紀スペインの知の森

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野村, 竜仁, Nomura, Ryujin メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1113

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「雑記」 - 16 世紀スペインの知の森 -

野村　竜仁

1. はじめに

啓蒙の世紀と呼ばれる 18 世紀、博物学は時代を代表する学問となる。西欧博物学は、直接的にはルネサンスの時代に生じた二つの活動が基盤になっていると言われる[1]。一つがギリシャ・ローマの古典の復興とその批判であり、もう一つが珍品収集の流行とそれに伴う収集目録の作成であった。

ルネサンスの自然観は、錬金術や占星術などを含んだ魔術的色彩の強いものであった。17 世紀、それまで支配的であったスコラ哲学に代わって、自然を機械として見る考え方が主流となる[2]。デカルトに代表されるそうした機械論的な自然観は、自然を解明するための鍵となって 17 世紀の科学革命を推し進めてゆく[3]。

その一方で、あらゆる現象を数学的に解明しようとしたデカルトの機械論は、個々の事象に肉薄すればするほど新たな仮説を必要とし、そうした仮説を網の目のように張り巡らせ、複雑化する傾向があった[4]。すべてを計算し、秩序立て、体系化する数学的自然科学によって概念や用語は際限なく増え、その一方で個々の事象に関する知識は十分とは言えず、自然についての具体的な知識を提供できない数学的自然科学に対する反発から、記述的自然科学が台頭する[5]。18 世紀には、ふたたびルネサンスのような多彩で驚きに満ちた自然観が隆盛を示している[6]。啓蒙の世紀における博物学の人気は、そうした時代の特徴を物語る出来事と言えるだろう。

本稿のテーマである雑記（miscelánea）は、16 世紀のスペインで数多く著された散文形式のひとつであり、後の博物学につながるルネサンスの二つの流れ、つまり古典を中心とした文献資料の検討と、新奇なるものへの関心を見ることができる。雑記は人文主義の流れをくみ、スコラ哲学のような思弁的なものではなく、自然や人間に関する叙述を特徴としている。必ずしも分類を意図しているわけではなく、時には荒唐無稽な内容も含まれているが、形而下の現象を渉猟し、それをまとめようとする姿勢に、後の博物学との共通点を見ることができるだろう。

---

[1] 西村三郎, 『文明のなかの博物学 西欧と日本（上）』, 紀伊國屋書店, 1999　p. 276.
[2] ジャック・ロジェ, 『大博物学者ビュフォン』, 工作舎, 1992, pp. 94-96.
[3] ジョン・ヘンリー, 『一七世紀科学革命』（東慎一郎訳）, 岩波書店, 2005, pp. 89-111.
[4] エルンスト・カッシーラー, 『啓蒙主義の哲学 上』（中野好之訳）, 筑摩書房, 2003, pp. 96-97.
[5] 同上, p. 133.
[6] 前掲ジャック・ロジェ, pp. 97-98.

後述するように、雑記というジャンルの特徴についてはスペインの研究者であるアスンシオン・ラリョ・グルスが自らの論考の中で示している[7]。本稿では、アスンシオン・ラリョ・グルスが取り上げているペドロ・メヒーアの『森羅万象雑記』[8]、アントニオ・デ・トルケマダの『百花の園』[9]、ルイス・サパタの『雑録』[10]を中心に、当時の自然科学との関連なども考察しながら、雑記の変遷について概観してみたい。

2. 雑記について

スペインにおける雑記の嚆矢とされるのが、ペドロ・メヒーアの『森羅万象雑記』である。既に述べたように、雑記はルネサンスと人文主義を背景として生まれたジャンルであり、メヒーアも、たとえばアテナイオスの『食卓の賢人たち』やアウルス・ゲッリウスの『アッティカの夜』などの古典にその範を求めている[11]。

この『森羅万象雑記』の成功によって、スペインでは 16、17 世紀に数多くの雑記が著された。雑記の形式としては、『森羅万象雑記』のように作者が様々な事柄についてコメントする、いわゆる「雑記」のほかに、本稿でも取り上げる『百花の園』と同じく対話形式のものや、フライ・アントニオ・デ・ゲバラの『私的書簡集』のような書簡形式のものもある[12]。

雑記というジャンルの特徴について、アスンシオン・ラリョ・グルスは次のように述べている。

> Huyendo del tratado extenso, de la actitud y técnica científica que restringiría la obra a un receptor intelectual, la miscelánea cumple su función simultáneamente entreteniendo y enseñando, divertiendo y despabilando el ingenio. Esta literatura se configura así en la encrucijada del ensayo

---

[7] Cf. Asunción Rallo Gruss, «Las misceláneas: conformación y desarrollo de un género renacentista», *Edad de Oro*, III (1984).
[8] 本稿における『森羅万象雑記』の内容およびその引用にあたっては、以下の版に基づく。
Pedro Mexía, *Silva de varia lección* I, Ed. de Antonio Castro, Madrid, Ediciones Cátedra, 1989.
---, *Silva de varia lección* II, Ed. de Antonio Castro, Madrid, Ediciones Cátedra, 1990.
[9] 本稿における『百花の園』の内容およびその引用にあたっては、以下の版に基づく。
Antonio de Torquemada, *Jardín de flores curiosas*, Ed. de Giovanni Allegra, Madrid, Editorial Castalia, 1982.
[10] 本稿における『雑録』の内容およびその引用にあたっては、以下の版に基づく。
Luis Zapata, *Miscelánea o Varia Historia*, Llerena, Editores Extremeños, 1999.
[11] *Silva* I, *op. cit.*, p. 162.
[12] *Ibid.*, pp. 63-64.

(discursos breves escritos en libertad compositiva), la novela (narraciones fabulosas de personajes ejemplares o singulares) y el apotegma (relato muy escueto, que a semejanza del chiste explota la agudeza).
（雑記は、膨大な論文であったり、受け手を知識層に限定してしまうような姿勢や学術的方法を避け、楽しませると同時に教えを授け、娯楽であるとともに才能を鍛えながら、その役割を果たす。これは、自由な構成で書かれた短い文章であるエッセイ、模範的あるいは個性的な人物に関する架空の物語である小説、冗談に似て、機知に磨きをかける簡潔な話としての警句が交差する文学である。）[13]
（括弧内拙訳）

アスンシオン・ラリョ・グルスの定義によれば、雑記の要素の一つとして警句があり、スペイン語の警句を集めたフアン・デ・マル・ララの『世俗哲学』などは、そうした警句集としての雑記を代表するものと言っていいだろう。この『世俗哲学』のモデルとなったのが、当時ヨーロッパで広く読まれていたエラスムスの『格言集』である[14]。アスンシオン・ラリョ・グルスも、このエラスムスの『格言集』と雑記との関連性を論じている[15]。

古代のラテン語の格言を集め、1500 年に初めて出版された『格言集』は、当初は約 800 の格言をおさめた文字通りの格言集であったが、増補を繰り返すうちに別の目的を担うようになる。1508 年、エラスムスは著名な印刷業者であったアルドゥス・マヌティウスと組んで『格言集』の増補版を手がけ、ヨーロッパで大きな成功をおさめているが、この頃から、古典から選び出した言葉の意味を解説するだけではなく、その言葉の裏に秘められた意図を明らかにすることに主眼を置くようになる。

エラスムスにとって格言とは、ただ単に人口に膾炙している言葉ではなく、そこには未知の知識が込められていなければならない。古代の英知を秘めた言葉こそ、格言となる。さらに 1515 年の増補版では、エラスムスは「戦争はこれを経験しない者には美しい」という格言を紹介しながら、当時の世相を踏まえて反戦を説いており、格言から敷衍する形で、時事的な問題についても自らの考えを表明するようになる。こうして『格言集』は、単に古代の格言を集めたものではなく、複数の目

[13] «Las misceláneas: conformación y desarrollo de un género renacentista», *op. cit.*, p. 162.
[14] アメリコ・カストロ,『セルバンテスへ向けて』（本田誠二訳）,水声社, 2008, pp. 190-246.
[15] Asunción Rallo Gruss, *Erasmo y la prosa renacentista española*, Madrid, Ediciones del Laberinto, 2003, pp. 67-80.

的を担う媒体として活用されてゆく。

アスンシオン・ラリョ・グルスは、エラスムスの『格言集』を近世における最初の雑記と捉えている[16]。そして『森羅万象雑記』では、古代の作家と並んで、エラスムスが知識の源泉として活用されている。メヒーアは『森羅万象雑記』においてその出典を詳細に記しており、プリニウス、アリストテレス、プルタルコスなどが典拠として示されているが、そうした古代の作家とともに、エラスムスの名前を見ることができる[17]。

16 世紀初頭、スペインでもエラスムスの名声は高く、その思想的影響のもとで、エラスミスタ（エラスムス主義者）と呼ばれる人々が現われる[18]。その後、対抗宗教改革の牙城となるスペインでは、エラスムスは危険視され、1559 年と 1583 年には著書が禁書の対象となっている。メヒーアは信仰の刷新などを訴えているわけではなく、そのためスペインにおけるエラスムス研究の先鞭をつけたフランスのマルセル・バタヨンなどは、メヒーアに対するエラスムスの影響について懐疑的である[19]。しかしメヒーアにとって、エラスムスは宗教的な指導者というよりも古代の知識を渉猟する偉大な先達であり、同じことはフアン・デ・マル・ララの『世俗哲学』についても言えるだろう。彼らは、宗教以外の面でエラスムスの遺産を継承したエラスミスタであった。

メヒーアが古代の作家をその範として紹介していることからも分かるように、雑記のような形式は古くからある。そうした長い歴史を考えた場合、この時期のスペインにおける雑記の特徴は、『森羅万象雑記』の序文でも述べられているように、スペイン語で著されたことにある[20]。俗語であるスペイン語で著された理由として、知識の普及とともに読者を楽しませる意図があったことは、先の引用でアスンシオン・ラリョ・グルスが指摘している通りである。

当時の国際語であるラテン語で執筆し、ヨーロッパで名声を博したエラスムスは、メヒーアのようにラテン語を解する人間に向かって書物を著した。印刷術の普及に伴い、この時期スペインでも多くの書物が印刷され、その結果ラテン語ではなくスペイン語の書物を読む新たな読者層が形成されていった。雑記が対象としたのは、そうした新たな読者層であり[21]、専門的な知識を持つ学識者ではなく、一般の人間

---

[16] *Ibid.,* p. 78.
[17] *Silva* I, *op. cit.*, p. 109-110.
[18] Cf. Marcel Bataillon, *Erasmo y España*, México, Fondo de Cultura Económica, 1982.
[19] *Ibid.,* p. 637.
[20] *Silva* I, *op. cit.*, pp. 162-164.
[21] «Las misceláneas: conformación y desarrollo de un género renacentista», *op. cit.*, p. 161.

を読者として想定している点でも、雑記には後の博物学の隆盛を髣髴とさせる面があると言えるだろう[22]。

2.『森羅万象雑記』と魔術的自然観

博物学者には、各地に出かけるフィールドワーカータイプの人間と、博物館にこもり、収集された標本の研究や分類などデスクワークを中心に行うタイプの人間がいると言われる[23]。この区分を当てはめれば、『森羅万象雑記』を著したメヒーアは、後者のタイプに属するだろう。自らの足で見聞を広めるのではなく、故郷のセビリアに居を定め、古今の書物を読みふけるのがメヒーアのスタイルである。そうして得た膨大な知識を、独自の視点で整理したものが『森羅万象雑記』である。

この本の内容について、メヒーアはすべて権威ある古典、あるいは同時代の書物を典拠としていると述べている[24]。雑記の作者には自分の体験を書き記す者もいるが、書斎型のメヒーアは他者の報告に基づいて現象を考察する。書物こそが彼の研究対象であり、その意味では典型的な人文主義者と言っていいだろう。

時に疑問を呈することもあるが、メヒーアは基本的に古典などの文献に依拠しており、つまり典拠を否定するのではなく、むしろその完成を目指している。そこにはメヒーアの歴史観が反映されていると考えられる。『森羅万象雑記』の第四巻の第七章に、人間の寿命に関する記述がある。メヒーアは、聖書や古典の文献に基づき、かつて人間の寿命は百歳を優に超えていたが、それが星の影響や体液のバランスが崩れたことによって、短くなってきていると主張する。そしてこうした変化を次のように結論づけている。

> De los tiempos más modernos, ni agora de los nuestros, no hallamos ya exemplos de vidas tan largas, porque, como dixe, se han ydo apocando y abreviando; que es grande señal que esta cosa anda ya por acabarse y que la fin deste mundo viene ya cerca.
>
> （その後の時代にも、そして今の我々の時代にも、こうした長寿の例は見られない。なぜなら、既に述べたように、生命が減少し、短くなってきているからである。これこそ、生命が終ろうとしており、この世界の最期が近いことを示す大い

[22] 前掲西村三郎, p. 12.
[23] 荒俣宏,『想像力の地球旅行』, 角川書店, 2004, p. 142.
[24] *Silva* I, *op. cit.*, pp. 159-160.

なる兆しである。）[25]
（括弧内拙訳）

メヒーアにとって、世界は終わりを迎えようとしていた。こうした終末論的な考えは、たとえばコロンブスなどにも見られるものであり[26]、『森羅万象雑記』の作者も、人類の終焉を見据えながら知識の精選に取り組み、その完成を目指した。

セビリアの知識階級に属していたメヒーアは、晩年になってカルロス一世の年代記作成者に任命されていることからも分かるように、歴史に対して高い関心を持っていた。そのため『森羅万象雑記』にも、物事の起源に関するテーマが多い。歴史上の最初の都市[27]や最初の言語[28]、あるいは最初の征服者[29]といった問題を、典拠となる文献に基づいて論証してゆく。人間の活動に関するものが中心だが、そこには天体を含めた自然の事物と人間との、魔術的なつながりを見ることができる。

サラマンカで学業を終えたメヒーアは、セビリアのインディアス通商院で宇宙形状誌学者の地位に就き[30]、周囲の人間から「占星術師」と呼ばれていた[31]。『森羅万象雑記』には、地上における星辰の影響に関して、数多くの記述がある。

メヒーアによると、幼年から老年にいたる人間の活動は、世代毎に異なる星の影響を受けている[32]。また、親と似ていない子供が生まれたりするのも、星の力が関係している[33]。こうした魔術的な力は、自然の中で共感あるいは反発として目に見える現象となって現れる。人間を含めた自然の事物の相性も、そうした共感や反発の作用に由来する[34]。自然と人間、つまりマクロコスモスとミクロコスモスの照応に基づく魔術的な自然観は、当時としては一般的なものであり、メヒーアが取り上げている話でも、たとえば妊娠している女性の想像力が胎児に及ぼす影響や[35]、共感と反感に基づく動植物の相性などは、イタリアのジャンバッティスタ・デッラ・

---

[25] *Silva* II., *op. cit.*, p. 378.
[26] 増田義郎, 『新世界のユートピア』, 中央公論社, 1989, p. 87-99.
[27] *Silva* I, *op. cit.*, pp. 184-186.
[28] *Ibid.,* pp. 378-383.
[29] *Ibid.,* pp. 227-231.
[30] *Ibid.,* pp. 13-14.
[31] Francisco Pacheco, *Libro de descripción de verdaderos retratos de ilustres y memorables varones*, Ed. de Pedro M. Piñero Ramírez y Rogelio Reyes Cano, Sevilla, Diputación Provincial de Sevilla, 1985, p. 309.
[32] *Silva* I, *op. cit.*, pp. 519-523.
[33] *Ibid.,* pp. 514-515.
[34] *Silva* II, *op. cit.*, pp. 32-44.
[35] *Silva* I, *op. cit.*, p. 512.

ポルタの『自然魔術』でも言及されている[36]。

元々魔術的な知識には実践的であることが求められ[37]、メヒーアの場合も、生姜は太陽の影響を受け、弱った胃に効果があるとか、サルビアには木星の力が及び、震えを伴う麻痺に効くなど、占星術と本草学を融合させたような処方が示されている[38]。あるいはダイヤモンドの指輪には呪術に対する抵抗力があり、心臓を強くするので妊娠中の女性に有益であるとか、アメジストは毒に対して抵抗力があり、また酔いを妨げるといった宝石の効能なども紹介されている[39]。

こうした、いわゆる自然魔術の活用について、メヒーアは次のように述べている。

> De la virtud y provecho de los anillos hechos por regla de astrología (guardados a ciertas horas y tiempos, y considerando los miramientos y cursos de las estrellas, assí en la fábrica del mismo anillo, como en la escultura de la piedra dél de ymágines particulares y señaladas), mucho es lo que prometen, como dixe, y muchos auctores lo tractan, diziendo adquirir la piedra nueva virtud y fuerça, allende de la natural suya, por la influencia de los planetas y estrellas al tiempo que se esculpió la ymagen, y por la liga y compañía de tal piedra y ymagen con tal metal en quien particularmente influyen (por serles particularmente subjectas y señaladas) con la virtud y fuerça natural de la misma piedra, ayudándose assí una virtud a otra; la qual compañía y liga y arte della es lo que llamamos magia natural [...]
>
> （占星術の法則に基づいて作られた指輪の力とその効果についてだが、そのためには指輪自体を作る時だけでなく、指輪用の石に特定の決まったイメージを刻む時も、星辰の運行やそのまなざしを考慮し、定められた時刻と時間を順守する必要があるが、既に述べたように、そこからは大きな効果を期待することができる。これについては多くの人間が論じており、彼らによると、石はそれが本来持っているものに加えて、新たな効能と力を獲得する。その理由は、イメージが刻まれる際に惑星と星が影響をおよぼし、さらにイメージを刻まれた石が、その石に元々備わっている効能と力によって特に影響を与える金属、つまりイメージを刻まれた石が特別に作用する金属に取り付けられて一緒になることで、それぞれの

[36] ジャンバッティスタ・デッラ・ポルタ,『自然魔術』（澤井繁男訳）, 青土社, 1990, pp. 69-75, 110.
[37] 前掲ジョン・ヘンリー, pp. 73-74.
[38] *Silva* I, *op. cit.*, p. 808.
[39] *Silva* II, *op. cit.*, p. 318.

効能が協力し合うからである。こうした交わりと結びつき、そしてその技を、我々は自然魔術と呼ぶ）[40]
（括弧内拙訳）

こうした照応に基づく自然観、つまり自然の事物との目に見えない交流を見出すパラノイア的な自然観は、その後徐々に衰退してゆく。17 世紀初頭に世に出た『ドン・キホーテ』では、騎士道物語のコードに基づき、巨人を象徴する風車小屋と反発し、城を象徴する旅籠と友好的な関係を築こうとした主人公の意図は、もはや喜劇か、あるいは悲劇として描かれることになる[41]。また雑記というジャンル自体も、『ドン・キホーテ』では戯画化された形で言及されている。ドン・キホーテ主従がモンテシーノスの洞窟へ赴く場面で、案内役を買って出た自称人文学者は、多くの学者の言葉を典拠として物事の起源を明らかにしたと豪語する。しかしそれを聞いたサンチョは、最初に頭をかいた人間はアダムで、世界ではじめて宙返りをした軽業師はルシフェルだなどと軽口をたたいている[42]。

『ドン・キホーテ』が執筆された頃には、雑記はその役割を終えようとしていた。しかしアメリコ・カストロが指摘しているように、ドン・キホーテが主張する運命に対する考えなどにはメヒーアの影響を見ることができる[43]。『森羅万象雑記』は、初版が出てから 4 年後にイタリア語に訳され、続いてフランス語版や英語版も現れており[44]、モンテーニュやシェイクスピアなどにも参照されたと言われる[45]。スペイン語で著された『森羅万象雑記』の知識が、作者の意図を越えて、広く伝播していったことが分かる。

3.『百花の園』とフォークロア

既に述べたように、形式的には『百花の園』は対話編であるが、『森羅万象雑記』と同じく雑記の一つに数えられている[46]。この『百花の園』をめぐって、『ドン・キホーテ』における書物の詮議の場面で、次のようなやり取りがある。

---

[40] *Ibid.,* p. 321.
[41] 前掲ジャンバッティスタ・デッラ・ポルタ, p. 19.
[42] ミゲル・デ・セルバンテス,『新訳ドン・キホーテ[後篇]』（牛島信明訳）, 岩波書店, 1999, p. 180.
[43] アメリコ・カストロ,『セルバンテスの思想』（本田誠二訳）, 法政大学出版局, 2004, pp. 626, etc.
[44] *Silva* I, *op. cit.*, pp. 56-59.
[45] *Ibid.,* pp. 123-126.
[46] Cf. «Las misceláneas: conformación y desarrollo de un género renacentista», *op. cit.*

「こちらに控えしは」と、床屋が答えた、「『ドン・オリバンテ・デ・ラウラ』ですよ。」

「ああ、その本の作者は」と、司祭がひきとった、「『百花の園』を書いたのと同一人物ですが、率直に言って、それら二冊のうち、どちらにより真実味があるか、というよりはむしろ、どちらにより嘘が少ないかは、わたしとしても決めかねるのです。」[47]

騎士道物語とは異なるが[48]、確かに『百花の園』には『森羅万象雑記』以上に奇想天外な内容が含まれている。作者のアントニオ・デ・トルケマダは、スペインのレオン県の町アストルガ出身と言われ、生年は 1507 年頃と考えられている[49]。このトルケマダも、メヒーアと同じくサラマンカで学問をおさめているが、メヒーアのように書斎にこもるタイプではなかったようで、若いころはスペイン各地やイタリアを旅しており、帰国後は秘書としてベナベンテ伯爵に仕えている。ベナベンテ伯爵はかなりの数の書物を所有していたが、トルケマダはそれだけでは好奇心を満たすことができず、近隣の他の領主の蔵書を訪ねている[50]。作品としては、『百花の園』以外に、先の引用にあった騎士道物語の『ドン・オリバンテ・デ・ラウラ』や『風刺的対話』、また秘書としての心得などを記した『写字生の手引』を著している。

メヒーアよりも 10 歳程度若いが、トルケマダはメヒーアとほぼ同世代の人間と言っていいだろう。しかし『百花の園』が世に出たのは 1570 年で、『森羅万象雑記』とは 30 年の隔たりがあり、雑記としての性格も、メヒーアのそれとは異なるものになっている。

『森羅万象雑記』が雑多な内容を盛り込んだ「森」であるとすれば、『百花の園』は、タイトルでも示されているように、「庭」（jardín）といった観がある。次に何の話が出てくるか分からない『森羅万象雑記』とは異なり、『百花の園』は大きく六つの章に分かれ、それぞれにテーマが設定されている。第一章が人間に生じる自然の驚異、第二章は河川や湖沼、さらにエデンの園について、第三章は亡霊、魔術、魔女について、第四章は運命や星辰の影響、そして第五章と第六章では、ヨーロッパの北方地域の風俗や現象が取り上げられる。時にはそうしたテーマから敷衍し、

---

[47] ミゲル・デ・セルバンテス,『新訳ドン・キホーテ[前篇]』（牛島信明訳）, 岩波書店, 1999, p. 55.
[48] Antonio de Torquemada, *op. cit.*, p. 16.
[49] *Ibid.,* pp. 10-11.
[50] *Ibid.,* p. 14.

たとえば第二章では、エデンの園の話に続いて世界のキリスト教徒が紹介され、日本についての言及もある[51]。それでも『森羅万象雑記』と比べれば、ある程度内容が整理されている。

章のテーマを見ても分かるように、『百花の園』も、『森羅万象雑記』と同じく魔術的な世界観に基づく雑記としての性格を有している。『森羅万象雑記』で取り上げられていた妊娠中の女性の想像力や[52]、星による人体への影響[53]、さらに『森羅万象雑記』そのものを典拠としながら、海に住む人間の話などが紹介されている[54]。

特徴的なのは亡霊や魔術をテーマにした第三章であろう。『森羅万象雑記』が白魔術、つまり当時の科学技術の領域にとどまっていたとすれば、『百花の園』は黒魔術も取り上げ、亡霊や魔女などにも言及している。こうした黒魔術への関心は、『森羅万象雑記』には見られなかった。ただし黒魔術と言っても、亡霊の出現や魔女の集会に関する風聞等を紹介する程度のもので、悪魔との交流や魔女の技を解き明かそうとする意図はない。

デッラ・ポルタの『自然魔術』もそうであるが、『森羅万象雑記』には実用に供する知識が紹介されていた。魔術的な自然観に基づき、先に述べたような植物や石の効能、指輪の力、あるいは眠る時の姿勢[55]、地球の大きさの測り方[56]、記憶術[57]、ワインの効能[58]などの知識が伝授される。これに対して『百花の園』では、植物の効能などへの言及もあるが[59]、『森羅万象雑記』と比べれば実用的な面は少ない。ここに、読者に対するメヒーアとトルケマダの姿勢の違いを見ることができる。

『森羅万象雑記』では、書物を渉猟して得られた学識および実践的な知識を読者に教示する。形として上から下への教化となり、そのため民衆を軽視している面もある[60]。これに対してトルケマダは、やはり民衆を軽視しているところもあるが[61]、知識を伝えるべき相手としてだけでなく、その源としても見ている。

既に述べたように、トルケマダはスペインのレオン出身であるが、『百花の園』

---

[51] *Ibid.,* p. 242.
[52] *Ibid.,* p. 123.
[53] *Ibid.,* pp. 363-364.
[54] *Ibid.,* p. 174.
[55] *Silva* II, *op. cit.*, pp. 276-278.
[56] *Ibid.,* pp. 124-130.
[57] *Ibid.,* pp. 57-60.
[58] *Ibid.,* pp. 103-109.
[59] Antonio de Torquemada, *op. cit.*, pp. 376-377
[60] 前掲『セルバンテスの思想』, pp. 349-350.
[61] Giovanni Allegra, «Sobre la fábula y lo “fabuloso” del *Jardín de flores curiosas*», *Thesaurus*, XXXIII (1978), núm. 1, p. 104.

には、彼の出身地であるスペイン北部の風俗やフォークロアが盛り込まれている[62]。トルケマダの知人の話として、葬儀を目にした男が幽霊に追われ、そのまま命を落とす話なども紹介されている[63]。トルケマダには、メヒーアのように書物を渉猟し、そこから得た知識によって自然現象を解き明かそうとする意図はない[64]。古典からも学ぶが、それとともにフォークロアに代表される民衆の声にも耳を傾ける。

こうした民衆に対するトルケマダの関心は、人間の習慣性を重視しているところからもうかがえる。トルケマダは『百花の園』でメヒーアと同じく幼少期より毒を食した人間が毒に対して抵抗力をそなえる話を紹介しているが、そこにメヒーアが星の影響などから来る人体の特異性を見ているのに対して[65]、トルケマダは、人間にとって習慣から得た性質がいかに重要であるかを述べている[66]。

人間の習慣性を重視する姿勢は、言語に関するトルケマダの考えにも表れている。

> ... aunque ahora nos parezca que se habla en Castilla el más polido y delicado romance que se pueda hablar, los que vendrán después de nosotros algunos años lo hablarán tan diferentemente que lo que se hallare escrito de nuestros tiempos les parecerá a ellos tan bárbaro como a nosotros nos parece el romance de algunas historias antiguas que se hallan de España [...] y de esta manera cada día se inventan de nuevo; y aunque no sean buenos, el uso hace que lo parezcan, como acaece en todas las otras cosas, que sólo el uso basta y tiene fuerza para hacerlas parecer mal o bien.
>
> （現在の我々にとって、カスティーリャで話されているロマンス語が可能な限りもっとも洗練され、優雅であると思われたとしても、何年か後に現れる人々は、全く異なる話し方をしているであろう。そして、スペインに伝わる古い物語のロマンス語を見て我々が思うように、彼らも我々の時代に書かれたものを見て、ずいぶんと粗野なものだと思うだろう。[...] こんな具合に、日々新しい言葉が考え出され、そして他のあらゆることと同じように、たとえそれが優れたものでなかったとしても、使用されれば優良であると見なされる。要するに使われれば十分

[62] Leonardo Romero Tobar, «Antonio de Torquemada, el humanista vulgar de los *Colloquios Satíricos*», en *Estudios sobre el Siglo de Oro Homenaje al profesor Francisco Ynduráin*, Madrid, Editora Nacional, 1984, p. 401.
[63] Antonio de Torquemada, *op. cit.*, pp. 264-266.
[64] Giovanni Allegra, *op. cit.*, p. 109.
[65] *Silva* I, *op. cit.*, pp. 406-409
[66] Antonio de Torquemada, *op. cit.*, p. 428.

で、それのみが良いか悪いかを判断させる力を持っている。）[67]
（括弧内拙訳）

優れているか否かではなく、それが一般に普及しているかどうかが優劣を判断する基準となる。それ自体が劣っていたとしても、一般に普及した場合には優良とみなされる。トルケマダにとって、民衆の反応は無視することのできない基準であり、フォークロアに対する関心も、こうした考えが背景にあると考えられる。

アスンシオン・ラリョ・グルスが指摘しているように、雑記には読者に刺激を与えるために驚くべき事物を取り上げる傾向があるが[68]、16 世紀後半になると、もはや古典はそうした驚きを生む素材を提供できなくなってゆく[69]。トルケマダは、古典以外のフォークロアなどからも新奇な現象を収集する。そして、メヒーアのようにそれらを再構成して独自の結論を導き出すのではなく、解釈を省き、娯楽として読者に提示する。

ルネサンスの特徴として、古典の復興とともにフォークロアなど民衆の文化への関心があるが、『百花の園』には、この後者の部分がより強く出ていると言えるだろう。あるいは、古典とフォークロアの結合を見ることができるかもしれない[70]。マキシム・シュヴァリエも述べているように、スペインのフォークロアは、セルバンテスなど当時の作家に作品の題材を提供した[71]。そうした自国のフォークロアの発見と活用は、文学におけるスペインの黄金世紀を生む一つの要因であったと考えられ、新たな驚異の源としてフォークロアを取り上げる『百花の園』にも、その一端を見ることができる。

4.『雑録』における諧謔

『森羅万象雑記』のメヒーアと『百花の園』のトルケマダが、ともに知識に寄って立つ文人タイプの人間であったのに対して、『雑録』の作者であるルイス・サパタは、どちらかと言えばガルシラソ・デ・ラ・ベガのようなルネサンス的な宮廷人であった。サパタは、1526 年、スペインのバダホス県リェレーナで生まれている。貴族の家系に連なり、幼くして時の国王カルロス一世の宮廷に小姓として出仕し、

---

[67] *Ibid.,* p. 498.
[68] «Las misceláneas: conformación y desarrollo de un género renacentista», *op. cit.*, p. 160.
[69] *Ibid.,* p. 180.
[70] Giovanni Allegra, *op. cit.*, pp. 106-107.
[71] Maxime Chevalier, *Folklore y literatura: el cuento oral en el Siglo de Oro*, Barcelona, Editorial Crítica, 1978, pp. 115-119.

後のフェリペ二世とともに少年時代を過ごしている。出仕後、カルロス一世からサンティアゴ騎士団の一員に任ぜられるという栄誉にも浴し、1549 年にはフェリペ二世に随行して、イタリアやフランドルなどを訪れている。

ところが、1566 年、サパタはサンティアゴ騎士団にふさわしくない人間として突然その地位をはく奪される。その後、フェリペ二世の命によって長く軟禁状態に置かれることになる。禁が解かれた時には 20 年以上の時間が経過しており、それからまもなくして、1595 年にこの世を去っている。

晩年に著された『雑録』は、作者の死によって未完の原稿として残され、1859 年になってようやく世に出ている[72]。『雑録』以外のサパタの作品としては、カルロス一世を讃える物語詩『高名なカルロス』があり、こちらは 1566 年に出版されている。その他、『雑録』と同じく原稿のまま保管され、1979 年に刊行された『鷹狩りの書』や、1592 年にリスボンで出版されたホラティウスの翻訳なども手掛けている。

サパタの『雑録』でも、これまでに見た『森羅万象雑記』や『百花の園』と同じく、自然や人間についての様々な現象や事件が紹介されている。『百花の園』のように幽霊に関する話や[73]、『森羅万象雑記』やデッラ・ポルタの『自然魔術』でも取り上げられていた動物同士の相性など[74]、ルネサンスの魔術的な自然観を垣間見ることもできる。しかしそうした内容を含みながらも、『雑録』には、『森羅万象雑記』や『百花の園』と比べて、魔術的な視点や新奇なるものに対する関心は希薄であると言える。

サパタには、メヒーアやデッラ・ポルタのように、真摯に自然の理を解き明かそうとする意図はない。古典に言及しつつも、過去の文献を典拠として歴史や自然を論じたり、あるいは実用的な知識を提示したりしない。また、市井の出来事に目を向け、民衆の間で聞いた話を採録するところはトルケマダと共通しているが、その一方で、『百花の園』のように魔法や魔術、あるいは北方地域の風俗といったエキゾチシズムを感じさせる情報を紹介することはない。

これまでに見た二つの雑記と比べて、『雑録』の特徴の一つと言えるのが、その軽妙な語り口である。『雑録』に光と雷をテーマにした章があるが、そこでは現象そのものについては既にプリニウスやアリストテレスなどによって検証されてい

---

[72] Cf. *Memorial Histórico Español: colección de documentos, opúsculos y antigüedades*, tomo XI, Madrid, Real Academia de la Historia, 1859.
[73] Luis Zapata, *op. cit.,* pp. 322-323.
[74] *Ibid.,* p. 306.

るとして多くを語らず、身近な事例、たとえば雷に当たって死んだ人間の話などを紹介するにとどめている。塵からカエルが発生するといったデッラ・ポルタも論じている問題に言及しても[75]、そうした魔術的なテーマに深入りすることはない。

この章の最後で、サパタは雷が原因で発生した火災について述べているが、この話を雷に関する章で取り上げた理由を次のように説明する。

> Esta relación estuvo en duda a quién le pertenecía en mis capítulos, si al de los incendiados o al de los rayos, entre los cuales dos no pueden meterse nadie; pero quise más enojar a los incendios que a los rayos, que del incendio se puede un hombre apartar, mas no del rayo, que es inevitable.
> （この話に関しては、これらの章の中でも、火災の章に入れるべきか、雷の章に入れるべきか迷うところで、と言うのも、この二つの間に割って入ることなど誰にもできないからで、しかし私は、雷よりも火事の不興を買うことにした。なぜなら、人間は火事からは遠ざかることができるが、雷から遠ざかることなど不可能だからである。）[76]
> （括弧内拙訳）

サパタの場合、語られる内容は探求の対象ではなく、むしろ語りのための材料といった観がある。『雑録』に「数字の 12 の偉大さ」という章があり、ユダヤの 12 部族からはじまって、キリストの 12 使徒、ヘラクレスの 12 の功業、『ローランの歌』の 12 英傑などが並ぶが[77]、これも数字を神秘主義的な視点から語るのではなく、12 に想を得て事物を列挙する修辞的な意味合いが強い。また、それまで語っていた内容を反故にするような結語を持ってくる場合もある。「力について」と題された章では、スペイン各地の怪力の持ち主が紹介され、しかしどれほど強大な力であっても、所詮は知力に及ばず、アルキメデスの梃子でもあれば、子供の方が重いものを持ち上げられると言って、話を締めくくる[78]。

サパタの言葉には、どこかシニカルな雰囲気が漂う。そうした態度の裏には、不遇であった彼の半生を垣間見ることができるように思われる。『雑録』の「成就しなかった幸福について」と題された章には、コロンブスやコルテスなど、一度は栄

---

[75] 前掲ジャンバッティスタ・デッラ・ポルタ, p. 101.
[76] Luis Zapata, *op. cit.*, p. 229.
[77] *Ibid.,* pp. 66-68.
[78] *Ibid.,* p. 197.

光を手にしながら、不遇な最期を遂げた人物たちが紹介されている。その中でサパタは、自分自身についても次のように述べている。

> Yo pensé también que en haber hecho la historia del emperador Carlos V, nuestro señor, en verso, y dirigídola a su pío y poderosísimo hijo, con tantas y tan verdaderas loas de ellos y de nuestros españoles, que había hecho algo. Costóme cuatrocientos mil maravedís la impresión, y de ella no saqué sino saña y alongamiento de mi voluntad.
> （私も、我らが主君であった皇帝カール五世の物語を韻文で著し、その息子にして信仰心篤く、この上ない力をお持ちの方に、お二人と我らスペイン人を称えるこれ以上ない真の言葉を添えて、献呈した。これによって、自分ではそれなりの仕事をしたと考え、四十万マラベディを費やして刊行したが、そこから得られたのは、憤りと、意図したものとは程遠い結果であった。）[79]
> （括弧内拙訳）

ここで語られている『高名なカルロス』は、史実と幻想が入り混じった『アエネーイス』を思わせる英雄伝であり[80]、『ドン・キホーテ』でも言及されている[81]。サパタにとっては渾身の作であったが、献呈したフェリペ二世に読まれることはなく[82]、必ずしも作者が期待したような評価は得られなかった[83]。それどころか、この詩が原因でサパタが軟禁状態に置かれた可能性もある[84]。サパタは、王権を絶対的なものとするフェリペ二世の政治姿勢を好ましく思っておらず、『高名なカルロス』には、そうしたサパタの政治的な考えが投影されている。

該博な知識を持ち、人類の英知を結集しようとしたメヒーアとは異なり、サパタは、サパタ個人として対象と向き合い、思うところを述べている[85]。そして、トル

---

[79] *Ibid.,* p. 224.
[80] Isidoro Montiel, prólogo de *Varia Historia (Miscelánea)*, Ed. de Isidoro Montiel, Madrid, Ediciones Castilla, 1949, pp. 37-38.
[81] 前掲『新訳ドン・キホーテ[前篇]』, p. 61.
Cf. Francisco Márquez Villanueva, *Fuentes literarias cervantinas*, Madrid, Editorial Gredos, 1973, pp.158-159.
[82] Manuel Maldonado Fernández, «Don Luis Zapata de Chaves, III Señor del Estado de Çehel de las Alpujarras y de las Villas de Jubrecelada (Llerena), Ulela y Ulula», *Revista de Estudios Extremeños*, LVIII (2002), núm. 3, p. 1007.
[83] Isidoro Montiel, *op. cit.*, p. 39.
[84] Francisco Márquez Villanueva, *op. cit.*, pp.144-158.
[85] *Ibid.,* p. 123.

ケマダのように市井の声に耳を傾けながら、そこから得た情報を、諧謔的とも言える軽妙な調子で語ってゆく。この語り手としてのサパタの存在が、『雑録』の魅力の一つと言えるだろう。

フランシスコ・マルケス・ビリャヌエバは、この『雑録』とセルバンテスの作品との類似性について考察している。物語の展開を促すために対話を活用したり[86]、火器に対する嫌悪や、あるいは佯狂への関心といったところに共通点を見ることができるが[87]、それとともにビリャヌエバは、既存のジャンルから逸脱することに対して、セルバンテスとサパタが感じていたであろう懸念について述べている[88]。

この時期の文学には、たとえば三一致の法則のように、古典に範をとることが求められた。雑記は世界の事物に関する情報を提供する書であったが、サパタの『雑録』は、様々な現象や出来事を紹介するよりも、作者自身の語りに重きが置かれている。後世の視点から見れば、これをエッセイ的と形容することも可能であろうが、当時はエッセイなるジャンルは確立されていない。そしてセルバンテスの場合は、『ドン・キホーテ』は既存のジャンルから逸脱した破格の小説であり、人気を博したものの、それだけでは作家としての評価、つまり名声には直接結びつかない。そのため既存のジャンルであり、より安定した地位を確保できるビザンティン小説の『ペルシーレス』に回帰することになる。

サパタの『雑録』には、ジャンルとしての雑記から逸脱しているところがある。サパタが試みたような物事の自由な検討は、スペインではフランスのようにエッセイには向かわず、小説にそのフィールドを見出すことになる[89]。

5. むすび

16 世紀のスペインの雑記は、セルバンテスに代表される当時の文学と密接に結びついている。その一方で、雑記は魔術的な自然観に基づいて世界を把握しようとした試みでもあり、のちの科学へとつながる面を持っている。もっとも、文学と科学の一致が「18 世紀に至るまで自明的だとされていた」[90]ことを考えれば、これはむしろ当然かもしれない。博物学の巨人で、「文は人なり」という言葉を残したビュフォンの場合も、文学と科学は切り離されておらず、彼の『博物誌』はすべてが文

---

[86] *Ibid.,* p. 120.
[87] *Ibid.,* pp. 171-172.
[88] *Ibid.,* pp. 179-180.
[89] *Ibid.,* pp. 174-175.
[90] ヴォルフ・レペニース,『自然誌の終焉』（山村直資訳）, 法政大学出版局, 1992, p. 156.

学であったと評されている[91]。やがて科学と文学は峻別されてゆくが、ビュフォン的な博物学の視点は、バルザックに代表される 19 世紀の小説に受け継がれてゆく[92]。

スペインの歴史でも、啓蒙の時代と言えば 18 世紀であるが、17 世紀後半、ハプスブルクの最後の王であるカルロス 2 世の治世に、その萌芽を見ることができる。その頃からノバトールと呼ばれる改革論者たちが現れ、自国の後進性に目を向け、特に科学の分野における刷新をめざして、啓蒙主義の先駆的な活動を開始している。カルロス 2 世の死後、スペイン継承戦争を経て王朝がハプスブルクからブルボンへ交替すると、フランスからやってきたブルボン王朝のもとで、スペインにはフランスをはじめ、イタリア、イギリス、中央ヨーロッパの啓蒙主義の影響がもたらされた[93]。

この時代のスペインを代表する知識人として、ベニート・ヘロニモ・フェイホーの名前を挙げることができる。フェイホーは、ノバトールたちと同じく自国の後進性を憂い、当時の誤った知識、彼の言うところの「一般的な誤謬」(erroes comunes) を指摘するために、8 巻からなる『世相批判』と、5 巻からなる『博識怪奇書簡』を著した。これらの書は、伝統的な価値の再検討と、民衆の間に蔓延していた誤謬を正すことを目的とした批判的なエッセイ、あるいは評論集であり、その中でフェイホーは、医学、物理学、地理、歴史、文学、神学など多岐にわたるテーマを取り上げている。

こうしたフェイホーの著書を、ホセ・ルイス・バレラは作者自身の言葉を引きながら「混成文学」(literatura mixta) と評し、その起源を黄金世紀、特に『森羅万象雑記』に求めている[94]。メヒーアとフェイホーは、ともにその該博な知識を駆使し、エッセイ的で、百科全書を思わせる浩翰な書物を著している。もっとも、本稿でも見たように、メヒーアの視点は基本的には伝統に根ざした中世的なものであり、これに対してフェイホーは、自国の伝統的な価値観を俎上に載せ、誤った知識を是正することに主眼を置いていた。また、雑記が読者を楽しませることを目的とした書物であったのに対して、フェイホーの場合は、民衆の誤りを批判することに自らの存在意義を見出していると考えられる[95]。それでも、メヒーアとフェイホーが何

---

[91] *Ibid.,* p. 165.
[92] ヴォルフ・レペニース,『十八世紀の文人科学者たち』(小川さくえ訳) , 法政大学出版局, 1992, pp. 52-77.
[93] アントニオ・ドミンゲス・オルティス,『スペイン 三千年の歴史』(立石博高訳) , 昭和堂, 2006, p. 232.
[94] José Luis Varela, «Literatura mixta y ensayo», en *Historia y crítica de la literatura española 4: Ilustración y neoclasicismo*, Barcelona, Editorial Crítica, 1983, pp. 89-95.
[95] Juan Bautista Avalle-Arce, «Los “errores comunes”: Pero Mexía y El P. Feijóo», *Nueva*

らかの啓蒙的な意図をもって知識の集成を行い、それを幅広い読者に伝えようとしていたことを間違いない。

スペインの啓蒙主義は、ブルボン王朝のカルロス三世の時代にその最盛期を迎える。カルロス三世はスペインの近代化に寄与した君主として知られ、また博物学にも関心を示し、探検旅行を推進して、バハ・カリフォルニアでの金星観測や、アメリカ大陸における博物調査なども実施した。その成果は、ヨーロッパに少なからぬ影響を与えたと言われる[96]。

このカルロス三世によって、スペインおよびその植民地からイエズス会が追放されている。啓蒙主義の時代、イエズス会は複数の勢力と対立関係にあり、ポルトガルやフランスで弾圧を受けた。スペインでも、王権神授説を掲げて中央集権的な国家を目指す政府にとって、独自の国際的なネットワークを持つイエズス会は疎ましい存在であり、1763 年、イエズス会追放の勅命が出されている[97]。

こうした王権強化策を推進した啓蒙主義者について、テオファネス・エヒドは、16 世紀の人文主義者やエラスミスタとの宗教的な共通性を指摘している[98]。啓蒙主義の洗礼を受けた彼らは、フェイホーが批判した民衆的な信仰を捨て、聖書やキリストを中心とした信仰を説いた。その結果、財産を所有し、民衆を主導する修道会と対立することになる。こうした対立の構図は、かつてのエラスミスタと、エラスムスを敵視したスペインの修道士との関係を髣髴とさせる。ネーデルランドからやってきたカルロス一世の宮廷には、たとえばアルフォンソ・デ・バルデスのように、エラスムスが主張したような聖書とキリストを中心とした信仰に共鳴し、それまでの修道会のあり方に疑問を呈し、その刷新を求めるエラスミスタたちがいた。

16 世紀のスペインには、後の啓蒙主義の時代につながるいくつかの要素を見ることができる。底流となってこの二つの時代をつなぐものが存在するのか、いずれ機会を改めて検証してみたい。

Revista de Filología Hispánica, X (1956), pp. 400-403.
[96] 前掲荒俣宏, p. 54-58.
[97] ウィリアム・V・バンガート,『イエズス会の歴史』（岡安喜代他訳）, 原書房, 2004, p. 464-473.
[98] Teófanes Egido, «Actitudes religiosas de los ilustrados», en *Carlos III y la Ilustración*, Spain, La Comisión, 1988, pp. 225-234.